ザイナブ 米国出身の元キリスト教徒（前半）

5.0

明:少女ザイナブはキリスト教に深く わりますが、そこに何かが欠けていると感じます。

目: 事新改宗者ムスリムの逸 女性

より: ザイナブ

日14 Jul 2014

集日 03 Aug 2014

これは、私が最も良くされる　である「精神性」「改宗」「改宗に しての家族の反 」「イスラ ム改宗 の私の将来像」についての非常に い　の 明です。

いいえ、私は男友 の影 で改宗したのではありません。

精神性

私は幼い から神に い 心を持ち けてきました。私は多くの子供たちと同じように、星やを眺めては、神とは なのか、何なのか、どこに居るのか、なぜ存在するのか、そしていかなる存在なのかと不思 に思っていました。神の存在を　するため、私は 似　ともいえるものを 行しました。たとえばテ ブルにコップを置き、神の存在を 明するために「それを かしてください」と んだりました。何の 果も得られなかった私は、物や　を えたり

、それを直接 なかったり（神は私がそれを目にするのを望まないのかもと思ったため）と、 々な手法を しました。 の 会では、どのような祈り方が　に「 果」をもたらすのかと、色々な方法で祈りました。 や膝を地面につけたり、横たわったり、目を じたり、姿 を正したり、指を真っ直ぐにしたり、　したり、 牲を捧げたりして、「神よ、もしも自　をお授けくだされば、私はもう二度とアイスクリ ムを食べません」と祈ったりしていました。しばらく つと、私はもし私が神の存在を 明するために神に んだことを神が叶えてくれたのであれば、もしくは私が望む 果をもたらす礼 方法というものが存在したのであれば、神ご自身ではなく、私自身が神ということになってしまうことに が付きました。

私はキリスト教徒として育ち、成 すると共に 々な教派の教会を れ、いかに彼らが神の存在を 信したか　者たちに ねました。この　は彼らが最も 繁に ねられるものだと思っていましたが、　には彼らは殆ど全くその　をされたことがなく、さらに くべきことは、大抵の 合、彼らはその　をされることを快く感じていないようでした。その 、私はその　に抵抗感を示すどころか、喜んで答えてくれた上、切 な探究心を感 してくれる牧 に出会いました。彼はライス大学を首席で卒 した知 人でしたが、より重要なこととしては、彼が非常に精神的な人物だったということです。彼は私が抱き けてきた全ての　に答え、 々な精神 や信条について教えてくれ、私の礼 の仕方を（プレゼントリストに かれたものを何もかも い う子供のようなものから、神の きを受け入れ、その指示に う者による成熟した瞑想的祈りへと）　革してくれました。彼と彼の妻と知り合えた私の人生は祝福されていました。

16 になった私は、日曜学校で子供たちを教えるようになりました。私は子供たちに神について教えることが世界中の何よりも好きでしたし、それが神によって与えられた才能だと信じていました。教 としての　の中での面白おかしい逸 は 山ありますが、それらについて りだすと、この既に い文章がさらに くなってしまいます。

その一年 、私はキリスト教指 者育成学校に通うよう められました。そこではさらに役立つ精神的原 を学べただけでなく、キリスト教における　の みと弱みについて牧 たちが学んでいることを知ることが出来たため、とても　ある　でした。これによって、私はイ

スラ ムのキリスト教に する い　の基 を身につけることが出来たのです。

翌年、私は身体的 精神的 感情的な苦境にある人たちのための「ヒ リング チ ム」への奉仕者としての所属を められました。そこで私はそれまでに出席した中でも最高の教会の中で、最高の人々に まれていたため、とても幸 に感じました。私はグル プの中でも年少者で　もなく、完全に能力の劣る立 にありましたが、彼らには私の求めていたような知 があったため、私はそこに留まりました。私は常々、悲惨な状 下にある人々に して「何を言うべきか」や、「何を言ってはならないべきか」を知りたいと思っていました。私はチ ムの人々が 付かない限りは彼らにそのことを言わないでおこうと めました。ここでも、私は最も尊敬すべき人々と付き合うことが出来て、自分の人生がそれに しないほどの祝福を受けていると感じました。しかし、 々私は彼らのレベルには く及ばない状 であったため、私は部屋を 回しつつセサミ ストリ トの歌について考えていました。

“これらの一つは他とは うんだ。これらの一つは属していないんだ。”

このヒ リング チ ムでも、多くの面白く 味深い逸 が生まれましたが、ペ ジ数の都合上、ここで ることが出来ないのは残念です。

ある 点において、私はチ ムメンバ の同僚たちを、精神的に最も れ、 明であると なし始めていました。彼らはあらゆる面で私に っていましたが、彼らは私がその年 に したとき、そうあろうとしている姿ではないと感じていました。私はキリスト教において神からの距 感を感じていました。私はこのことを牧 と し合い、自分が神との　をもっと きたいと言いました。彼はムスリムたちが一日に5回礼 していることに言及し、私がより多く礼 を捧げてみてはどうかと示唆しました。もちろん、彼は私のイスラ ムへの 味をそそるつもりはなかったのです。しかし 果的には正反 となりました。

また、私はキリスト教に しての　を抱えていました。天国が与えられるのは、イエスを救世主として めることであり、善行や 行は　ないという概念は、私にとってはまったく理にかなわないことでした。キリスト教においては、理 的にはその人生において 日罪を犯し けた人物であっても、死の一秒前にイエスを救世主として めるのであれば天国

に行くのです。またその人生において 日善行に尽くした人物であっても、イエスを救世主として めなければ永久に地 で苦しむのです。こんなに筋の通らないことなどあるでしょうか?
キリスト教は他にも多くの　を抱えていますが、ここでの言及は省略することにします。

この 事のウェブアドレス:

https://www.islamreligion.com/jp/articles/126

著作　2006-2015 断　を禁じます。　2006 - 2023　IslamReligion.com. 断　を禁じます。